

報告

## チベット史書における仏の扱い

Interpretations of the Buddha in Tibetan Historical Texts

谷口富士夫\* 佐久間留理子\*\*

TANIGUCHI Fujio, SAKUMA Ruriko

For further deepen our consideration of the relationship between Avalokiteśvara and the Buddha-body theory in the *rGyal rabs gsal ba'i me long* and the *Ma ni bka' 'bum*, which the authors have examined so far, we will briefly outline the direction of future research.

キーワード：チベット仏教 (Tibetan Buddhism)、観自在 (Avalokiteśvara)、仏身説 (the Buddha-body theory)

## 1. 研究の目的と背景

## (1) 目的

筆者 (谷口・佐久間) がこれまでに考察を加えてきた『王統明鏡史』および『マニ・カブム』(摩尼十万語)の観自在菩薩<sup>1</sup>と仏身論の関係についてさらに考察を深めるため、今後の研究の方向性を簡潔に示す。

## (2) 背景

チベット仏教史は大きく前伝期 (nga dar) と後伝期 (phyi dar) に分けられる。仏教が吐蕃王国に伝来した時代は前伝期に属するが、その由来を説く文献 (ここではその内容が史実に即しているかにかかわらず「史書」と呼ぶこととする) は大部分、後伝期に成立した。

吐蕃王国について扱った史書のうち、谷口はこれまでに『王統明鏡史』(*rGyal rabs gsal ba'i me long*)における仏身説と『マニ・カブム』(*Ma ni bka' 'bum*)における仏身説について考察を加えてきた (谷口 2022, 2023, 2024)。また、佐久間 (2023b) は、『マニ・カブム』所説の成就法 (密教的観想法) において、本尊の六字観自在が五仏よりも高い地位に昇格していること、及び、仏身説の三身が礼拝対象として登場することを指摘した。

『王統明鏡史』は 14 世紀にサキャ派の学僧ソナム・ギェルツェン (bSod nams rgyal mtshan) によって著された歴史物語であり、吐蕃王国のソンツェン・ガンボ王を観自在菩薩の化身であると見なした上で、チベットの地に仏教が伝わるのに観自在がどのような役割を果たしたかを、正統派の三身説を関連させながら述べている。なお、この場合の「観自在」には、その化身であるとされる史的人物ソンツェン・ガンボ王その人と、彼の治世の初期に現れたとされる自生の十一面観自在像との二つが含まれる。

『マニ・カブム』は、ソンツェン・ガンボ王をやはり観自在菩薩の化身と見なした上で、『マニ・カブム』自身がそのソンツェン・ガンボ王の著したテキストであるという設定になっている。実際の成立は、12 世紀から 13 世紀にかけて 3 人の発掘者 (gter ston) によって著され、15 世紀までにほぼ現行の形が完成したと考えられる埋蔵経典 (gter ma) である。

観自在の化身であるソンツェン・ガンボ王が著したとされる埋蔵経典であるという点で、『マニ・カブム』と近

<sup>1</sup> 「観自在」は、玄奘による新訳であり、サンスクリットの名詞「アヴァローキテーシュヴァラ」(Avalokiteśvara) に即した訳語である。また、チベット語の「チェンレーシク・ワンチュク」(spyen ras gzigs dbang phyug) もまた、「観自在」に対応する。インド・ネパールでは、「アヴァローキテーシュヴァラ」の別名として、「ローケーシュヴァラ」(lokeśvara) がしばしば用いられる。他方、「観世音」という名称も知られるが、それは鳩摩羅什による旧訳で、「世の衆生の救いを求める声を聞いて救いを与える」ことを意味する (速水 2000: 44)。日本においては「観世音」、「観音」とも呼ばれるが、本稿では上述のサンスクリットの名詞やチベット語に対応する「観自在」の名称を用いる。

い関係にあるとされる『カチェム・カコルマ』(*bKa'chems ka khol ma*)については、近年、榎殿伴子氏によって精力的に研究成果が発表されている(榎殿 2023, 2024a, 2024b)。

なお、谷口・佐久間(2025)では、チベット史書の一つである『パクサムジョンサン』(*dPag bsam ljon bzang*)におけるソンツェン・ガンポ王と観自在をめぐる記述に関するテキストのローマナイズを行い、今年度、その翻訳研究を行う予定であった。しかし、その内容を理解するためには『パクサムジョンサン』以外のチベット史書の内容を理解しておく必要があると気づいた。そのため、その翻訳研究の代わりに本稿を執筆した。

## 2. 研究の展望

『王統明鏡史』については、それに先行して書かれ、その著者が執筆に際して参考にしたチベット史書として『プトン仏教史』(*Bu ston chos 'byung*)と『赤冊史(フラン・テプテル)』(*Deb ther dmar po*)がある。

『プトン仏教史』には、ソンツェン・ガンポ王の初期に自生の十一面観自在像がチベットにもたらされたことについての言及があり、さらにソンツェン・ガンポ王自身が観自在菩薩の化身とみなされ、彼と2人の王妃ともども十一面観自在像の中に消えていなくなったことについての言及もある。しかし『王統明鏡史』のようにそれらを仏身説と関係させて展開することはない。同じことは『赤冊史』にも当てはまる。

上述したように『プトン仏教史』にはソンツェン・ガンポ王の時代の記述において仏身説の展開はないが、そのことはプトンが顕教の仏身論に疎かったことを意味する訳ではない。プトンは密教にも造詣が深かったが、顕教に対しても並ならぬ学識を有していた。そして彼は、『現観莊嚴論』に対するハリバドラ注に対して、複注『阿含の穂』(*Lung gi snye ma*)を著している。『現観莊嚴論』は仏身が3種であるとも4種であるとも読みうるテキストで、ハリバドラの指摘に基づいて、後世のインド及びチベットで仏身論論争が起こった。プトンはそれに対する註釈を施す程度に仏身論についても詳しくしたのである。

むしろ問題の設定としては、“『王統明鏡史』や『マニ・カブム』が観自在菩薩に即して仏の三身説を展開するのに、なぜ同じテーマを扱う『プトン仏教史』や『赤冊史』にはそのような展開がないのか”が当を得ていない可能性がある。仏ではなく菩薩に過ぎない観自在に即して仏身説を展開することに無理があるので、正統的な仏身論を知っている者はむしろそのような展開をしないほうが当然であろう。

だとすれば、『王統明鏡史』における仏身論の特異性を明らかにするためには、『プトン仏教史』や『赤冊史』において仏と観自在菩薩とがどのような関係性を持つものとして説明されているかという観点で分析していくことによって、一定の成果が得られるのではないと思われる。

### 【謝辞】

本稿は、2025 年度科学研究費助成事業・基盤研究(B)(一般)「チベットにおける観自在信仰の受容と変容：『王統明鏡史』と『摩尼十万語』を中心に」(課題番号 23K20424)(研究代表者 佐久間留理子、研究協力者 谷口富士夫)による研究成果の一部である。

### 【引用・参考文献】

・一次資料

*rGyal rabs gsal ba'i me long*. 北京: 民族出版社 (2015) .

・二次資料

[日本語文献]

星泉(2016)『古典チベット語文法 - 『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて-』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

今枝由郎(監訳)(2015)『チベット仏教王伝 - ソンツェン・ガンポ物語-』岩波文庫。

稲葉正就・佐藤長(1964)『フウラン・テプテル』法蔵館

上野牧生(2018)『『プトン佛教史』試訳(1)』『真宗総合研究所研究紀要』35: 125-141.

- (2020) 『『プトン佛教史』試訳(2)』『真宗総合研究所研究紀要』37: 25-51.
- (2022) 『『プトン佛教史』試訳(3)』『真宗総合研究所研究紀要』39: 273-294.
- (2024) 『『プトン佛教史』試訳(4)』『真宗総合研究所研究紀要』41: 51-74.
- 楨殿伴子 (2021a) 『チベット建国説話と観自在信仰—『マニ・カンブン』「偉大なる歴史章を中心に」—』起心書房.
- (2021b) 『『マニ・カンブン』における如来蔵思想』『印度学仏教学研究』69(2): 810-806.
- (2023) 『『カチェンカクルマ』と『マニ・カンブン』—如来蔵思想の系譜—』『印度学仏教学研究』71(2): 168-174.
- (2024a) 『『カチェム・カクルマ』15章版の第1章: 和訳とテキスト』『身延山大学仏教学部紀要』25: 13-23.
- (2024b) 「チベットにおけるアティシャと観自在菩薩の邂逅—『カチェム・カクルマ』に見られるカダム宗ラディン(レティン) 寺派の密教と象徴教示 (brda): 『カチェム・カクルマ』13章本二異本の第一章校訂テキストと試訳—』『日蓮学』8: 1-63.
- 佐久間留理子 (2015) 『観音菩薩—変幻自在な姿をとる救済者—』春秋社.
- (2022) 『『王統明鏡史』第4章・第5章にみる六字真言の字義・功德・表象とその宗教的・思想的背景』『大阪観光大学研究論集』22: 9-22.
- (2023a) 「(研究ノート) 『摩尼十万語』の基礎的研究(1): 第2部第4章の部分訳とテキストのローマナイズ」『大阪観光大学研究論集』23: 33-43.
- (2023b) 『『摩尼十万語』の護法王ソツェン・ガンポによって著された成就法—第2巻第4章から—』『印度学仏教学研究』72(1): 346-353.
- (2024a) 「(研究ノート) 『摩尼十万語』の基礎的研究(2)—第1巻セクション8所収「大悲者の成就法」の部分訳とテキストのローマナイズ—」『大阪観光大学研究論集』24: 69-79.
- (2024b) 『『摩尼十万語』所説『大悲者の成就法』』『印度学仏教学研究』73(1): 326-333.
- (2025) 「(研究ノート) 『摩尼十万語』の基礎的研究(3)—第1巻セクション8所収「大悲者の成就法」の部分訳とテキストのローマナイズ(2)—」『大阪観光大学研究論集』25: 77-86.
- 立川武蔵 (1989) 「サキャ派」長尾雅人編『岩波講座東洋思想 第11巻 チベット仏教』岩波書店: 153-170.
- (2022) 『西藏仏教宗義研究 第一巻(改訂版) トゥカン『一切宗義』サキャ派の章』公益財団法人東洋文庫.
- 谷口富士夫 (1988) 『『現観莊嚴論』における法身』『日本仏教学会年報』53: 61-74.
- (1999) 「チベット密教の仏身」立川武蔵・頼富本宏(編)『シリーズ密教 2 チベット密教』春秋社: 64-77.
- (2018) 『『現観莊嚴論』トルポバ註における仏身論』『印度学仏教学研究』67(1): 334-341.
- (2022) 「チベット歴史物語『王統明鏡史』第17章における仏身論』『名古屋女子大学紀要』68: 77-87.
- (2023) 『『マニ・カブム』に見られる仏身説の特徴』『印度学仏教学研究』71(2): 762-768(175-181).
- (2024) 「チベットにおける観自在信仰から見た仏身説—『マニ・カブム』の所説を中心として—」『東海佛教』69: 69-80.
- 谷口富士夫・佐久間留理子 (2025) 「(報告) 『バクサムジョンサン』(dPag bsam ljon bzang) における ソツェン・ガンポ王と観自在をめぐる記述—I テキスト編—」『大阪観光大学研究論集』25: 103-108.
- 速水侑(編) (2000) 『観音信仰事典』神仏信仰事典シリーズ4、戎光祥出版
- 山口瑞鳳 (1983) 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店.
- (1988) 『チベット 下』東京大学出版会.
- [外国語文献]
- Kuznetsov, B.I.(ed.) (1966) *Rgyal rabs gsal ba'i me long (The Clear Mirror of Royal Genealogies)*. Leiden: E.J. Brill.
- Obermiller, R. (1986) *The History of Buddhism in India and Tibet*. Delhi: Sri Satguru Publications.
- Sorensen, Per K. (1994) *The Mirror Illuminating the Royal Genealogies: Tibetan Buddhist Historiography. an Annotated Translation of the XIV th Century Tibetan Chronicle: rGyal-rabs gSal-ba'i Me-long*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Taylor, McComas & Lama Choedak Yuthok (1996) *The Clear Mirror: A Traditional Account of Tibet's Golden Age*. Boulder, Colorado: Snow Lion Publication.
- Trizin Tsering Rinpoche (Trans.) (2007) *Mani Kabum*. vol. I & II. Singapore: [www.manikabum.com](http://www.manikabum.com).
- Vostrikov, A. I. (1970) *Tibetan Historical Literature*. Harish Chandra Gupta (trans.), Calcutta: Indian Studies Past & Present.